

ますむらひろしの銀河鉄道の夜



独特のファンタジーな世界観と特徴ある猫のキャラクターで知られる漫画家 ますむらひろしさん。
1月28日(土)から八王子市夢美術館で開催される特別展『ますむらひろしの銀河鉄道の夜-前編』に向けて、作品に対する思いなどお話を伺いました。

— ますむら先生の作品といえは、猫が登場人物として描かれますが、なぜ猫ではなく、猫を描くようになったのでしょうか？
初めて漫画を描いたのが手塚治虫に応募した時で、突然漫画を描こうというのに「一等賞をとろう」と「人と違って目立つものを描くには」と考え、人を描こうという気がまず起こらなかった。その頃、宮沢賢治の作品をとにかく読んでいて、賢治の世界にはいろんな動物が人間と共に出てくるわけですね。また、公害が問題になっていった時代でもあって、汚染された川の魚を猫に食べさせる実験があったんです。そのニュースを見たときに、「なぜ猫がこんなに苦しまなきゃいけないんだ」とこの憤りを漫画にすることができないかと思っただけです。

— もともと猫はお好きだったのですか？

特に好きじゃなかったですね。昭和30年代というのは、猫を愛玩で飼う人はあまりいなかった。それが、漫画を描くようになってから猫を飼うようになって、これまで40年の間に30匹くらいの猫と過ごしましたね。猫が家に出たり入ったりできる生活がしたくて、車通りが多いところを避けて、もともと林があったところに居を構えて庭をつくりました。

— 漫画を描こうと思ったきっかけは？

最初は漫画家なんて夢にも思っていなくて、デザイナーを目指して専門学校に通っていました。しかし、商業デザイナーの仕事は企業の宣伝に関わる…その企業が公害を起こしているというのが段々と見えてきて、きれいごとかもしれないけど、それを知って自分は何もできなくなってしまうたんですね。そこでさっき言った猫のニュースを見てビビッとさちやったわけですよ。

— 絵は昔から描いていたのですか？

絵は好きでした。ただ、美術部には所属していません。漫画家を目指して漫画を模写するというような

これだけ相当な量の絵を一つの作品で出すというのはこれまでにはやったことがなかった『銀河鉄道の夜』の魅力や深みを1ページ1ページに詰め込んだので、見たえのある展示になるのではないかと思います。



ますむらひろし「銀河鉄道の夜・四次稿編」より ©ますむらひろし



ますむらひろし「銀河鉄道の夜・四次稿編」より ©ますむらひろし

— 賢治は、視覚的な人。
だから、その頭の中にある画に向かっていきたい。

歳月と共に、この作品をもつ一度描きたいと思わされている気がします。
— 賢治が生きた時代や見てきた世界に思いを馳せ、緻密な検証をもとに忠実に描こうと思うのは何故でしょうか？
自由な連想はいくらでもできますよね。でも賢治って非常に視覚的な人なんです。彼の頭の中に風景があるんですよ。だから、どうもその画に向かっていたい。銀河鉄道の列車の窓から色々なものが見えるんですが、銀河だから当然のように星があると思って読んでしまっ。でも、賢治が書いたことを実際に絵にしてみると、「一度も星が出てこないぞ」と気づくんですね。賢治は、こういうことを全部分かっている仕掛けしているんです。

— 作品と向き合う中で、ターニングポイントや価値観が揺れ動くような瞬間はありましたか？
二回目に銀河鉄道の夜を描いた昭和60年。冒頭のシーンの6時ころを回った時、という描写から物語が進んでジョバンニが夢座を見た時刻をおおよそ8時くらいかなと推定して、星座盤をもってきて合わせてみたんです。すると、8月中旬くらい…これはお盆のお話だと、全身がソワソワとなりました。その頃、まだ夏の物語だという説は出ていなかったんですね。しかも、作品の舞台が欧州なら、お盆なんて概念はないはずなんです。でも、もしかすると仏教徒だった賢治の「あの世で救われるのではなく、この世で救われなくては」という賢治の思いが隠れていたのかもしれない。

賢治は何回も改稿を重ねていて、ある時期すごくはつきりと自身の考えを書いていたのが第三次稿。そこに出てくる黒い帽子の男の台詞として、賢治の全てを注ぎ込んだような言葉が出てくるんですが、どうも最後の第四次稿ではそれを外してしまっている。今回私が描いたのは第四次稿編ですが、「さうはいくか」と黒い帽子の男を入れ込んで笑。こっちはこっちの集大成ですね。賢治はこれだけ面白いんだという…。これは一種の研究書だと思っています。

— 最後に、八王子での展覧会に向けてメッセージをお願いします。

講演会のお知らせ

『銀河鉄道の夜』を描いて気づいたこと

漫画家のますむらひろしさんにご登壇いただきます。

2/18(土) 14:30開演

会場：八王子市学園都市センター イベントホール(12F)

入場無料・要申込

定員：200名 ※応募者多数の場合は抽選

応募方法：往復はがき【締切2/3(金)必着】

※詳細は夢美術館ホームページをご覧ください。

ますむらひろしの銀河鉄道の夜-前編

1/28(土) ~ 3/26(日)

独特のファンタジーと猫のキャラクターで知られる漫画家ますむらひろしが、新たな研究成果を踏まえ宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を漫画化。全4巻のうち前編(1・2巻)を紹介します。

10:00~19:00(ただし、入館は18:30まで) ※月曜休館(休日の場合は開館し、翌平日が休館)

【料金】一般 700円 学生・65歳以上 350円 ※中学生以下無料 ※ラ・ラ・ラ友の会会員は2割引

【お問合せ】八王子市夢美術館(八王子市八日町8-1 ビュータワー・八王子2F)

TEL: 042-621-6777 FAX: 042-621-6776 【ホームページ】https://www.yumebi.com

20周年 Anniversary

(公財)八王子市
学園都市文化
ふれあい財団
設立20周年記念

八王子市
夢美術館
EXHIBITION



ますむらひろし

1952年山形県米沢市生まれ。1973年にデビュー作『霧にむせぶ夜』で第5回手塚賞準入選。初期代表作『アタゴオル物語』で線り広げられるユーモラスな猫ヒデヨシと個性豊かなキャラクターの物語は人気を呼び、以後「アタゴオル」の作品は長期に渡ってシリーズ化される。一方で、宮沢賢治の作品『銀河鉄道の夜』『やまなし』『度十公園林』などを漫画化。2001年宮沢賢治学会イーハートブ賞を受賞。

— 作品に対する自分の中での変化はありましたか？

一回目に描いた時には、ジョバンニのことを「面倒くさい子どもだな」と笑。それが、今回描いた時にはジョバンニの気持ちや自分なりに分かったような感覚があって、それに驚きました。あとは昔は手放して「賢治ってすごい」って思っていた自分が、時間が経って「ここからはついていけない」と思ったり。30年という

— 今回の展覧会の作品「銀河鉄道の夜」ですが、3度にも渡ってこの作品に取り組み続けたのは、何故なのでしょう？
一回目のページ数は百枚という条件があった。二回目には「百枚、それでもまだ描き足りなかった。60歳を過ぎてオリジナルを絞り出すのはもうやめたと思っただけで、賢治だったらまだ描きたいことがある」と。今回は六百枚、約3倍の内容が中に詰まっています。宮沢賢治という人が願って生きようとしたその集大成がこの作品で、それだけに何度も戻って来れるんだと思います。

— 宮沢賢治に惹きつけられたきっかけは？
小学校のときに「度十公園林」を習ったんですね。度十という、昔でいうと「特殊学級」に通うような子どもが出てきて、授業では「度十はスゴイ」と扱われているのに、実際は別の学級に閉じ込められている…そうだった矛盾を5年生のときに見せつけられて。だから子ども心に宮沢賢治を読んだって「怖い」んです。きれいごとじゃない。それくらい賢治は面倒くさいんです。それから図書館で借りてきて読んでみたけど、その頃はちっとも面白くとも思わなくて、ただ「さみしい」という感覚だけ。
東京に出てきて「宮沢賢治っていいぞ」といわれて、『注文の多い料理店』の初めの一文を読んだ時、一気に自分の故郷でもある東北の季節とか空気がよみがえったんです。東北の、美しく、そして怖いところが…「あ、この人の文章には本当の東北が書かれている」と思った。それから毎日のように賢治の作品を読みました。

ことはしていませんでした。横尾忠則さんの作品に出合った時に衝撃を受けて、ああいう一枚絵での世界観というのに憧れていました。